

第108回

"ゼロから"の積み重ねによる社会変革

河合 純一

kawai junichi

5歳から水泳を始め、15歳で視力を失って以降はパラ水泳界で活躍してきた河合純一さん。パラリンピックには、1992年バルセロナから2012年ロンドンまで6大会連続で出場し、金メダル5個を含む計21個のメダルを獲得したレジェンドです。2016年には日本人として初めて国際パラリンピック委員会(IPC)パラリンピック殿堂入りを果たしました。早稲田大学大学院在学中に発足した日本パラリンピアンズ協会会長や日本パラ水泳連盟会長などを務める傍ら、2020年には日本パラリンピック委員会(JPC)委員長に就任。東京パラリンピックでは日本代表選手団団長を務められました。コロナ禍での東京パラリンピックはどう映ったのか、そして日本のパラスポーツの未来についてお話をうかがいました。

聞き手/佐野慎輔 文/斎藤寿子 写真/フォート・キシモト、河合純一、公益財団法人日本パラスポーツ協会 取材日/2021年12月16日

感動を呼び起こした 選手の真摯な姿と感謝のコメント

JPC委員長として迎えた東京パラリンピックを終えて、いかがでしょうか?

2020年1月にJPC委員長に就任し、その後、東京パラリンピッ クの日本代表選手団団長を拝命しました。当初はおよそ半年 後の2020年8月に東京パラリンピック開幕を迎えるという気持 ちでいたわけですが、開幕まで200日を切った段階で、新型コ ロナウイルス感染症が世界中に拡大し、2020年3月24日には 東京オリンピック・パラリンピックの1年延期が決定しました。そ のニュースを聞いた時には、選手はもっと複雑な思いがあった と思いますが、準備を進めていた私たちも、「これからどうやっ て準備を進めていったらいいのだろうか」というような混乱もあ りました。なにしろオリンピック・パラリンピックの歴史上、初めて のことでしたから。結果的に原則無観客として開催されるな ど、当初予定していたものとは違う部分が多々ありましたが、 コロナ禍という厳しい状況のなか、大きな混乱もなく、無事に 大会を終えることができたことが、最大の成果だったと思いま す。日本選手団も、金13、銀15、銅23の合計51個と、2004年ア テネパラリンピックの52個に次ぐ史上2番目に多いメダル数を 獲得してくれました。特に前回の2016年パラリンピックではゼ 口だった金メダルを13個獲れたというのは、最高と言っても過 言ではない成果だったと思います。その背景には、多くの国 民の皆さんがご協力してくださり、また最終的には東京パラリ ンピック開催を70%近い人たちが支持してくださったことがあ りました。また、コロナ禍でも安心安全に大会を開催したという のは、世界的に非常に意義あることを日本は成し遂げたのだ と思います。実際、大会期間中に各国の選手団団長やNPC (各国のパラリンピック委員会)の方とお会いするたびに、私 も感謝の言葉をいただきました。「いかに厳しい状況である かは世界中の人たちがわかっています。そういう状況のなか

で、このように安心安全な大会を開催 してくれた日本に、我々は感謝の気持 ちしかありません」と。東京パラリンピッ クが終わった今も、そのような言葉を いただくんです。近年では、これほどま でに日本という国に対する信頼や高 い評価をいただけたというのは、私の 記憶ではなかったと思います。確かに 巨額のコストがかかっていることなどを含めて、さまざまなご意見があるのは重々承知していますが、厳しい状況にも関わらず国際的に大きな責任を果たしたということについては、国民として誇りに思っていいのではないかなと思います。

一 開幕前は、東京オリンピック・パラリンピックの延期や中止を望む声も多かったわけですが、開催後の共同通信の世論調査によると、オリンピックは62.9%、パラリンピックは69.8%の人が、「開催して良かった」という評価をしています。このような国民の気持ちの変化を、中心にいた河合さんにはどのように感じられていたのでしょうか?

選手たちのひたむきな競技への姿勢やコメントが、国民の皆 さんの気持ちを揺り動かしたのだと思います。日本選手団団 長として私が選手にお話させていただいていたのは、まずは 安心安全な大会にするということで感染対策を万全にして、 日本選手団からはひとりも感染者を出さないこと。もうひとつ は、選手たちが最高のパフォーマンスを発揮できるように、私た ちも精一杯サポートするので、選手たちもそこに注力していき ましょう、ということ。それらを踏まえたうえで、こういう状況のな かでも開催していただけたことに感謝し、組織委員会やボラ ンティア、そしてさまざまな意見があるなかでもご協力してくだ さっている国民の皆さんに対してその気持ちを伝えていきま しょう、というような話をさせていただきました。選手たちのコメン トには必ずと言っていいほど、感謝という言葉がありましたが、 本当にありがたいと感じていたのだと思いますし、そういうコメ ントや真摯な姿が国民の皆さんにも何か伝わるものがあった のではないでしょうか。これは選手だけではないと思います が、今回のコロナのパンデミックによって失ってみて初めて、こ れまで当たり前だったことが当たり前ではなかったということに 気づいた、ということがたくさんあったと思います。だからこそ 感謝の気持ちが出てきた。それについては、私は決して人間 にとって悪いことではなかったと思っています。むしろこれまで

> 気づいてこなかったことのほうを反省 しなければなりません。選手の教育と いうことからしても、今後はそういう当 たり前にある環境がいかにありがたい ことなのか、ということに、ふだんから気 づかせていくことはとても大事なことだ と考えています、そのためにも、選手 に関わる指導者や組織のスタッフが、



閉会式に参加し手を振る日本代表選手団

そういう意識を持たなければいけません。 結局は、誰が一番偉いということではなく、 みんながみんな、お互いをリスペクトすると いうことが大事なのだと思います。例えば 大会を開催するにしても、選手がいなけ れば開催できませんし、かといって運営し てくれる人がいなければパフォーマンスを 見せる舞台を用意することはできません。 そして、応援してくれる人、見てくれる人が いるからこそ、大会が盛り上がり、選手の モチベーションも高まるわけですよね。そう 考えると、何が欠けても大会やスポーツの イベントは成立しません。東京オリンピック・ パラリンピックは、そのことを改めて認識 させてくれた大会でもあったと思います。 それを今後につなげていくことが、日本ス

ポーツ界としてはとても大事な責務だと思います。今はまだそ のことに「気づいた」段階。これをどう定着していくかが重要 だと思います。

―― 東京パラリンピックが開催できて良かったと思えた瞬間 はいつでしたか?

自分でも驚いたのですが、東京パラリンピックの閉会式の翌日に団旗返還式で選手団に話をしている途中、ふいに涙が流れたんです。その時に「ああ、実感はなかったけれど、本当は自分も苦しかったんだなあ」と。そう思った時に、本当に無事に終えられて良かったと心の底から思いました。自分が現役時代、パラリンピックがほとんど認知されない経験をしてきたなか、東京オリンピック・パラリンピックが一体となって招致をめざし、そして2013年に開催が決定してから約8年、さまざまなことがありましたが、選手たちが乗り越えてすばらしい結果を出してくれました。そのことに選手団団長としてほっとして、その役割を終えたということもあって、涙が出てきたのだと思います。

―― 先ほど河合さんもおっしゃいましたが、こうした状況下でも得られたことはたくさんあったと思います。ご自身では東京パラリンピックのレガシーとは何だとお思いですか?

自国開催のパラリンピックを現役選手として迎えられるのは 一生に一度あるかないかですよね。特に今回は、競技会場 や選手村に入れた人間が非常に限られた特殊な大会でし た。そう考えると、今回東京パラリンピックに出場した選手が



公式服装発表会で選手団長として挨拶

体験したこと自体がレガシーであり、今後につなげていかなければいけないことなのだと思います。選手たちが経験したこと、感じたこと、気づいたことを伝え続けることこそが、今後の社会を変えていくレガシーになるのだと思います。

―― 今回の東京オリンピック・パラリンピックのテーマのひと つが、「多様性」、「共生社会」でした。その意味でも、東京パラリンピックの意義は非常に大きく、約7割の国民から支持されたということを考えても、将来に向けてのひとつのステップになったように思います。

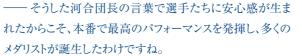
JPCが独自に調査した結果、開幕前に「東京パラリンピックを見たい」という人はおよそ35%でした。しかし、実際に開催したあとに東京パラリンピックを観てくれた人は50%を超えているんです。一方、東京オリンピックのほうは開幕前に「見たい」という人が45%ほどで、実際に見た人は約60%でしたから、パラリンピックよりオリンピックを見た人のほうが割合は大きいんです。ただ、テレビの放送時間を考えますと、オリンピックは16日間でおよそ1500時間、一方パラリンピックは13日間で約590時間でしたので、放送時間の割合からするとパラリンピックのほうが見た率は大きいのだろうと推測できます。そう考えますと、東京パラリンピックを開催した意味というのは非常に大きいと感じていますし、「多様性」、「共生社会」という点においても認識の「入口」に来てくれた人たちはたくさんいるように思います。ただ、理解度という点においては個人差がありますので、それをこれからどうしていくのか、ということが課題としてあるかと思います。

コロナ禍で生きた パラリンピアンの実体験

― コロナ禍での開催実現に向けて、日本選手団団長として最も苦心されたのはどういう部分だったのでしょうか?

1年延期が決まって以降、選手や競技団体に 対して「組織委員会もJPCも、しっかりと開催に 向けて準備を進めている」ということをこまめに な」と思いました。「中学校の教員をしていた人 が、子どもたちを感染のリスクにさらしてまで観戦 全メダルを獲得した国核慎吾選手 させようとするのか」とまで言われましたので。ま

伝えていくように心がけました。「だから選手の皆さんは、来 たる本番に向けてやるべきことを、やれる範囲で突き詰めて やってほしい」ということを、節目節目で伝えるようにしました。



私の言葉がというよりも、もともとパラリンピック選手というのは、特に中途障がいの選手は人生において、それまで当たり前だったことを失うという実体験をしてきているわけです。今回コロナ禍で、それまで日常だった「買い物に行く」「誰かに会う」などということができなくなり、不便な生活を余儀なくされたわけですが、同じように当たり前が当たり前ではなくなった経験を持つパラリンピアンは、現状を受け止め、どう次に向かっていくかという思考に切り換える力や習慣が人よりあったんじゃないかなと。わりと早い段階で気持ちを切り替えられた選手は少なくなかったと思いますし、そういう選手が本番で活躍できたように思います。それと1年延期によって若手が伸びたことも、良い結果につながったと考えられます。その背景には、コロナ禍においていち早くナショナルトレーニングセンターを使用させていただき、トップアスリートがしっかりと練習を積み重ねる環境を構築できたことも大きかったですね。



会場で選手を応援する河合団長

一一一方で東京オリンピック・パラリンピック期間中は、SNSでの誹謗中傷も取り沙汰されましたが、どのように感じられていたでしょうか?

開幕前に、私が東京オリンピック・パラリンピックの 学校連携観戦プログラムの話をした際にも相当 ネットで叩かれました。正直「ここまでひどいんだ な」と思いました。「中学校の教員をしていた人 が、子どもたちを感染のリスクにさらしてまで観戦 させようとするのか」とまで言われましたので、ま

さに風評被害と同じで、根拠のないイメージだけが先行して 話が広がっていく怖さというものを改めて感じました。本来は 130万人ほどの子どもたちを東京パラリンピックの競技会場に 招待し、生で観戦していただく予定だったのですが、実際は 1万5000人ほどに留まりました。でも、その子どもたちにとって は貴重な経験になったと思います。ご尽力いただいた関係 者の皆さんには感謝の気持ちしかありません。もちろん団体 行動ですので早めに決めなければいけないという制約もあ り、これから感染状況がどうなっていくか不透明ななかでの 決断は、自治体も学校も、本当に難しかったと思います。ただ、 何でもそうですが「難しい」と言ってやめることは簡単。時に はそれが勇断となることもありますが、どうすれば実現の方向 に向かっていけるかを考えることのほうが難しいし、大変なん ですよね。それをしてくれた自治体や学校のおかげで、予定 のわずか約1%とはいえ、実際にパラリンピックを観て、そこで 見たこと、感じたことを伝えられる子どもがいるというのは、非 常に大きいと感じています。実は開幕前、東京パラリンピックを 直接会場で観戦したいという子どもたちや保護者は8割ほど いたんです。ところが、わずか1、2割ほどの反対の声のほうが 大きく取り上げられてしまいました。もちろん、私たちが強制的 にということではなく、例えば屋外の競技であれば、それこそ 教室にいるよりも距離を保つことができるということも考えられ たわけです。この学校連携観戦プログラムのことに限らず、 最近の風潮として多数の意見よりも、少ないはずの誹謗中傷 をするコメントのほうが拡大しやすい傾向にあるというのは、 問題のように思います。

―― 今回はコロナ禍における不安や不信感が、東京オリンピック・パラリンピック、あるいは選手たちにぶつけられてしまったところもあるかと思いますし、メディアもそういう風潮に乗っかって助長させる報道が多かったように思います。そういう点では、今大会におけるメディアについては、どう感じられましたか?



確かにそういう部分もあったかと思いますが、メディアがパラ リンピックやパラリンピアンのことを多く報道してくださったおか げで、大勢の方々に知っていただくことができたわけですの で、本当に感謝しています。特に今回は無観客でしたので、 メディア以外で知る手段がありませんでしたから本当に大き なお力添えをいただいたと思っています。また、2013年に東 京オリンピック・パラリンピックの開催が決定して以降、さまざま なメディアで障がいのある当事者たちが解説やインタビュー をするというような新しいチャレンジをしていただいたことが、 より多くの人たちに真の部分をお伝えすることができた要因 だったように思います。開幕直前になって付け焼刃的に行わ れたわけではなく、メディアもトライ&エラーを繰り返すなかで、 しっかりと準備をして本番を迎えたと思いますので、まずは感 謝したいなと思います。

変化を恐れない社会への 実現に向けての一歩に

―― 東京オリンピック・パリンピックの開催が決定して以降、 「バリアフリー化」が問われてきました。ハード面だけでなく、 心のバリアフリーという点も含めて、どこまで進んだと感じら れているでしょうか?

ハード面もソフト面も、とても良くなってきたと思います。ただ、そう 簡単に一朝一夕で改善されるものではありません。ハード面は 基準を設けて、法整備をすることで改善することは多々ありま すが、それで良しとはなりません。例えば点字ブロックですが、 あるからいいというわけではありません。もし点字ブロックの上に 自転車などが置かれていて、白杖の人がつまずいてケガをす るようなことが起きる社会では、決して良くはないわけです。また エレベーターを設置したところで、ベビーカーを押している人や 車いすユーザーがいても、誰も降りて優先しようとしない社会が 「バリアフリーが整っています」とは言えないと思うんです。つ まり、単純にモノだけを用意すればいいという話ではないという ことです。それだけに完璧なゴールはないように思います。必 要なところに必要なものを用意することは大事ですが、利用す る人たちのことを考えてつくられたものなのか、実際に利用でき る環境にあるかということが重要で、時代によって目標とする内 容やレベルも頻繁に変わると思います。だからこそ誰もが生き やすい社会というものを、みんなが想像を働かせて行動すると いうことが一番求められているのではないでしょうか。そういう 点においては、少しずつ前進してきているように思います。

―― 障がいというのは、 社会がつくり出すもので もあり、誰しもがそういう 状況に陥る可能性があ ります。例えば、英語が 苦手な人が海外に行け ば、人とコミュニケーショ



ンをとることは非常に難しい。また年齢を重ねれば、足腰が弱 くなり、階段の上り下りが辛いという人も少なくありません。つま り障がいに対して、いかに自分ごとに置き換えられるかという ことが重要なのではないでしょうか?

今自分の周りにある環境下のみで生活をしている人にとっ ては、何の支障もないわけです。一方で「多様性」を考えた 場合、それまで自分たちが快適に生活してきた環境の枠を 超えなければいけませんので、そこで違和感や抵抗感を強 く持つ人たちが少なくないのだろうと。ただ時代は変化する ものですから、それに伴って社会も人間も変化していくのは 必然。だったら、その変化をいかに楽しめるかどうかだと思 います。人間は変わらない人はいません。幼少期から青年 期においては身体的にも精神的にも変化があって、それは 「成長」でもあるわけです。ならば、老いという変化もまた成 長のひとつなのではないでしょうか。身体的にはマイナスなこ とが多いかもしれませんが、経験を積み重ねてきた人として の成長はあるはずですから。変化を怖れている人たちという のは、自らの成長を怖れて止めてしまっているのと同じことだ と、私は思います。

―― 東京パラリンピックが、変化という成長を怖れない社会 へのきっかけとなることが望まれます。

何事もすぐに変わるものではなくて、実を結ぶには畑を耕す ところから始まるわけですが、今は東京パラリンピックによっ て、さまざまな種類の種がまかれた状態だと思います。そこ から水をまいたり、肥料を与えたりしなければいけないわけ ですが、そうしたことをこれから誰がやっていくのかが重要 です。私たちが理想とした果実ができるかは、これから次第 ですが、少なくともそのきっかけづくりにおいては東京パラリン ピックによって推し進めることができたのではないでしょうか。 とはいえ、十分だったかと言えば、関東圏外の地方や、ある 部分の世代には、まだまだ届いていないなということも感じて いますので、そこはしっかりと向き合って取り組んでいかなけ ればいけないと考えています。

求められる裾野拡大につながる ハイパフォーマンス化

――日本パラ水泳界の第一人者である河合さんは、1992 年バルセロナパラリンピックから5大会連続で出場し、金メダ ル5個を含む21個のメダルを獲得するなど、世界トップスイ マーとしてご活躍されました。そもそも水泳を始めたのは、い つ、どんなことがきっかけだったのでしょうか?

5歳から水泳を始めたのですが、自宅の近所にスイミングス クールができたので、親に「行ってみる?」と言われたのがきっ かけでした。始めたばかりのころは、水泳に何か特別な思い があったわけではありませんでしたが、小学生の中学年ごろ には水泳が特別な存在になっていたような気がします。周り で先輩たちが県大会で優勝したりするのを見て、「自分もそ うなりたい」という憧れのようなものが生まれて、高みをめざ すようになりました。

―― 競技人生のなかでは、苦しいこと、辛いこともたくさん あったかと思います。水泳を辞めたいと思ったことはなかっ たのでしょうか?

ないわけではありませんでしたが、本気で「もういやだ」と 思ったことはなかったです。いずれにしても今思えば、続けて きて良かったなとは思っています。

一 水泳をがんばって続けたことが、教員への道を志す きっかけにもなったのでしょうか?

水泳を教えてくれた先生に対する尊敬の念や憧れがありま したので、無関係ではなかったと思いますし、そう思える先 生に出会えたことはとても幸運でした。あとは単純に学校が 好きだったということもありました。だから、そこを自分が働く 場所にできたらなと、小学生の時から教員になるという夢を 持っていました。

―― 水泳をやってきたこと、そし て教員を務めた経験が、現在の 組織人である河合さんをつくって きたということになるのでしょうか? 未だに「どうして私がJPCの会長 になったのだろう」という気持ちも ありますが、ポイントとしては2つあ るかなと思っています。ひとつは





パラリンピックに初出場したバルセロナ1992大会 (左が本人)

パラリンピックに6度出場して、メダルを獲った経験があるとい うこと。もうひとつは、教員を務めたあとに大学院に行って2 年間勉強しているということも関係しているかなと思います。 大学院では、ロジカルに物事を考えることを学ぶことができま した。また、大学院に通っていた2003年に日本パラリンピア ンズ協会を発足したいと思って組織化に動き、会長に就任 して取り組んできたことも大きかったと思います。さらに2008 年には静岡県総合教育センターの指導主事に就任して、教 員への教育のようなことをしたのですが、そこでは議会の予 算の仕組みを学び、予算取りのために資料を作成するとい う経験もしました。さらにJSC(日本スポーツ振興センター)研 究員、ナショナルトレーニングセンター副センター長など、国内 のスポーツ行政の一端を担ってきました。そうしたなかで事 業をマネジメントする役を務めたというようなあらゆる経験が あったからこそ、IPC会長に選んでいただき、実際に自分自 身にもそれだけの素地が備わっていたのだと思います。

―― 河合さんは、常に何かにチャレンジする人生を歩まれて きたように思います。

実際にチャレンジしてきたかどうかはわかりませんが、もともと 新しいことや、今までやったことのないことを生み出すことが 好きなのだと思います。人がやったことをリノベーションをして いくというよりは、ゼロの状態からクリエイトしていくことのほう が、エネルギーを向けやすいし、自分の力を発揮しやすいと いうこともあるんでしょうね。

―― ゼロからイチをつくり出すことに向けられるエネルギー が、パラリンピックをどうしていくかという活動につながって いったということでしょうか?

そうですね。ただ常にさまざまな課題があって、それを自分の 立場でどうしていくのかということはいつも整理しながらやっ ているつもりではありますが、JPCという組織のなかに入っ て、改めてそういうことをできる立場になったんだなとは思い





日本パラリンピアンズ協会会長として講演

ます。また、東京オリンピック・パラリンピックが1年延期となっ た間に、「IPCって、どういう組織であるべきなんだろう」という ことをじっくり考えて、検討する時間をいただけたということも 大きかったですね。もちろんJPCは、JPSA(日本パラスポーツ 協会)のなかの内部組織ではありますが、そのなかでもIPC の役割を明確にして、今後進むべき方向性をまとめた「JPC 戦略計画 |を初めて策定し、2020年12月に公表したというの も、「ゼロからイチの作業」のひとつだったかなと思います。

――いま取り組まれている「JPC戦略計画」の中身につい て、教えてください。

IPSA(日本パラスポーツ協会)とIPCとの役割の違いを明確 にしたのですが、まずひとつはJPCにしかできない役割がある ということを示しました。例えば、IPCから日本国内で「パラリン ピック」という名称を用いての活動がゆるされているのはJPC のみ。つまり、パラリンピック・ムーブメントを起こす中核となる 任務があるわけです。また、選手団を形成してパラリンピックと いう大会に派遣することができるという点においても、JPCは 国内では唯一無二の存在です。それらをより良く運営してい くためには、JPCという組織には何が必要なのかということを ブレイクダウンして考えるということをしました。そうして最終的 にJPCのミッションとして定義したのが「世界を目指すパラアス リートの活躍を支援し、パラリンピック・ムーブメントを推進す る」ということ。もちろんこれからパラリンピックをめざすアスリー トの支援活動として、発掘・育成・強化の部分で携わるわけ ですが、それはどちらかというと選手自身やスタッフ、NF(国 内競技団体)が中核を担ってやっていくこと。一方でIPCにし かできないのは、世界をめざすアスリートの活躍を支援するこ

とだろうと。そして、アスリートの活躍によって、共生社会をめ ざすというパラリンピック・ムーブメントを推進すること。この 2つを柱にして、しっかりと活動を行っていこうと考えています。 まだ具体的な内容としては、さまざまな意見があり、議論をし ているところですが、いずれにしても「JPC戦略計画」をまとめ たことで、今まではなかった、大きな意味での将来に向かって いく道筋、羅針盤を持つことができ、スタッフ全員がイメージを 共有することができるようになりました。これが、最も大きいと感 じています。「ゼロからイチの作業」で言えば、「ゼロ」のまま では議論さえも起こりません。「イチ」をつくったからこそ、さま ざまな意見が出てきているわけですので、非常に意義のある ことだったと思います。

―― オリンピックに倣うようにして、パラリンピックもハイパ フォーマンス化が進んでいます。競技レベルの向上が、魅力 を生んでいる要因になっている一方で、一般の障がいのあ る人たちとの乖離が生まれているという指摘もありますが。

ハイパフォーマンス化というのは、つまりは進化し続けている ということ。東京パラリンピックで金メダルを獲得したパラ水 泳の木村敬一選手が講演で「自分たちアスリートにとって、 パフォーマンスを"安定"させたり"維持"させるということは、 "後退"を意味するんだ」という話をしていましたが、私もそ れがハイパフォーマンススポーツの本質だと思っています。な ぜなら、世界は常に進化し続けているからです。ということ は、自分たちも進化しない限り、勝ち続けることはできません。 それは、オリンピックもそうだと思いますが、パラスポーツにお いてはパラリンピックでしか示すことができない価値だと思い ます。そして、その価値を伝えることができるのも、世界で活 躍するアスリート以外にいません。大事なのは、その価値を どのように一般社会に伝え、還元していくか。それがスポー ツが社会に必要とされるかどうかがカギだと思います。

――すそ野を広げる部分は JPSAが、世界トップをめざす部 分はJPCが担うということになる のでしょうか?

主には、そういう役割分担になる のだと思います。ただ両面ともに 必要で、高みをめざすことで、遠 くの景色まで見えるようになると いう意味でも、ハイパフォーマン





東京2020パラリンピック水泳で金メダルを獲得した木村敬一選手

ス化がひいてはすそ野を広げるというところにもつながってい くと思っています。単純にどちらか一方ということではなく、循 環サイクルが重要だと考えています。東京パラリンピックで日本 のメダル総数は11位でしたが、それではトップの国が果たして パラスポーツのすそ野が広がっているかというと、そうではな いわけです。日本がめざすのは、そこではありません。だから こそ、しっかりとビジョンを掲げたうえでハイパフォーマンス化を 推進していくことが重要なのだろうと思います。私自身のこの 数年間の取り組みは、まさにその部分を根幹にしてきました。 例えば、2021年11月19日に『視覚障害者のためのスポーツ指 導|という解説書が、筑波大学出版会から発行されたのです が、私も編集で携わらせていただきました。これまで視覚障が い者に特化した書籍というのは、日本にはありませんでした。 視覚障がい者が行う陸上や水泳などの競技紹介や簡単な 指導方法というのはあったと思いますが、これは視覚障害者 のクラス分けから、幼少期にはどういう特徴があるかなどとい うように網羅した専門書になります。これは数年前から私的な 勉強会を続けていくなかでさまざまな方にご協力いただきな がら、最終的には39人の方にご執筆いただいて出版が実現 しました。もちろん、これが完璧だと思っているわけではないで すし、すでに改訂したほうがいいという声もあがっている部分 もあります。でも、こうした書籍を出さなければ、そもそもそうい う話も出てこないわけですので、これもまたレガシーのひとつだ ろうと。これは普及における大きな一歩になると思いますし、特 別支援学校の教員や、視覚障がい者への指導に困っている 地域の指導員の方にとっては、心のよりどころとなる一冊にな るのではないかと思っています。「ゼロからイチの作業」を積 み上げていかないと、社会は変わっていかないのだろうと思 います。また、2021年7月29日には『目でみるアスリートの図鑑』 を東京書籍から発行させていただき、こちらは監修のひとりと して携わらせていただきました。これはハイパフォーマンスアス リートのすごさを小学生にも伝わるものをつくろう、ということか

ら始まったのですが、私としては将来のスポーツ科学者を育 てたいという思いもこめられた一冊なんです。未だスポーツ界 に蔓延る暴力やハラスメント、根性という言葉だけで片付けら れてしまう非科学的トレーニングという問題の根幹には、選手 たち自身に考える力がないことがあると思っているんです。今 の時代、スマートフォン一台で、さまざまな科学的根拠に基づ いた情報やデータを選手が得ることができます。だからこそ、 小学生のうちからそういうスポーツ科学の知識を知ることで、 スポーツ界の問題が解決され、社会を変えていくことができる のではないかと思っているんです。指導する先生やコーチが 言っていることをそのまま鵜呑みにするのではなく、自分で考

えることができる習慣を持ったアスリートを 育てていくことが重要なのだと思います。 それと、小学生が自由研究にスポーツ科 学を取り上げるようになってもらいたいとい うこともあります。これはぜひ笹川スポーツ 財団と協力して、何かできないかと思って いるのですが、いかがでしょうか。



『視覚障害者のための

---- それは、面白いですね。 ぜひ検討していきたいです。

例えばコンクールを開くなどすれば、応募してくる小学生はた くさんいると思います。そもそも、なぜこれまで自由研究の課 題にスポーツ科学がないのかが不思議なくらい。絶対に面 白いと思いますし、スポーツによって社会を変えていくことに もつながると思うんです。

求められるスポーツ界と企業との win-winの関係性

――日本の場合、パラアスリートの層の薄さに課題があるよ うに思います。これは日本が戦争もなく平和な国で、交通事 故も少なく、医療レベルも高いという証明でもありますが、一 方で今後の選手発掘については対策が必要となるのでは ないでしょうか。

IPCも国やISCと共同で選手の発掘事業をしていますが、東 京パラリンピック後に募集をかけたところ、応募数は1年前の 倍でした。問い合わせの件数も増え、また問い合わせ内容の クオリティも上がったと感じています。これまでは「うちの子ども にも障がい者スポーツをやらせたいのですが、どうしたらいい でしょうか」という初歩的な問い合わせが多かったのが、東京 パラリンピック後は「うちの子どもにはこういう障がいがあるの

ですが、良いコーチを紹介していただけませんか」というような、具体的にどうしたらパラリンピックに出られるかということを質問してくる方が増えたんです。東京パラリンピックが開催されて選手たちのパフォーマンスだけでなく、指導者やスタッフの存在を多くの人が目にしたことで、社会に大きな変化が起こっているのだと思います。ただ、そこからパラリンピックでメダルを取れるくらいまでの選手に育っていくかは、また別の要素が必要となります。まさにその部分をJPCが対策として講じようとしているところでして、次世代につなげるような取り組みを重点的に行っていかなければいけないと感じています。

一あるパラリンピアンから聞いた話ですが、東京パラリンピック開催後はもっと理解度が深まると思っていたら、未だに車いすユーザーがスポーツ施設を利用するのを断られるケースも少なくないと。障がいのある方たちがスポーツ施設を利用できるようにする環境整備は、国をあげて取り組まなければいけない問題だと思いますが、どのように考えられていますか?

東京パラリンピック直後に、萩生田光一文部科学大臣(当 時)とお会いした際、直接私のほうから「現在の日本のパラ スポーツにおける課題は、大きくは2点あります」というお話を しました。ひとつは、障がいのある児童、生徒が学校体育の 授業で見学という待遇を受けていることがあること。もうひと つは、障がいのある方々が地域のスポーツ施設を利用しよ うとすると、「車いすで床に傷がつくから」などという理由で 断られるケースがあること。これらは国民の教育を受ける権 利、スポーツをする権利の観点からしても由々しき問題です し、「障害者差別解消法」(2016年4月1日に施行。正式名称 は「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」。 障がいの有無に関係なく、その人らしさを認め合いながら、 共に生きる社会をつくることをめざすもの)に基づいても間 違っていますので、国として正してほしい、というお願いをしま した。その約2週間後に文部科学省が東京オリンピック・パラ リンピックで活躍した選手の顕彰、表彰式を開いた際、萩生 田大臣から「ご指摘いただいた課題について、きちんと予算 を組んで早急に取り組んでいきます」というふうに約束して いただきました。実際、2021年12月には「第3期スポーツ基本 計画」(2022年度から5年間の国のスポーツ施策に関する 指針)の中間報告が出されましたが、そこに加えられた3つ の新たな視点のひとつに「性別、年齢、障害の有無、経済的 事情、地域事情等に関わらず、すべての人がスポーツにアク



2009年IOC総会(コペンハーゲン)でのプレゼンテーション

セスできる社会の実現・機運の醸成を目指すという視点」が 記されています。今後、年度末の最終案を制作していく段 階でも、しっかりと確認していきたいと思います。現段階で課 題は多々ありますが、東京パラリンピックが開催されたからこ そ、国がそういう課題に目を向け、真摯に取り組んでいこうと 考えるきっかけになったと思いますので、大きな成果だったこ とは間違いないと思います。ただ、国民の皆さんが実感を伴 うまでにはどうしても時間がかかってしまうところは否めませ ん。法律やルールが定められれば、すぐに課題が解決し、社 会が変わるわけではありませんので。それでも時間はかかる けれども、社会が変わっていくきっかけを、東京オリンピック・ パラリンピックは提供したという点は間違いないと思います。

― スポーツ界全体の問題になりますが、事業を進めていくにはどうしても大きな財源が必要になります。しかし東京オリンピック・パラリンピックが終わったことで、国からの支援もどうなっていくのか不透明です。企業がどこまで競技団体や選手たちへのスポンサードを続けてくれるか、という部分も決して楽観視はできません。この問題については、いかがでしょうか。

今までのように、東京オリンピック・パラリンピックがあるからという理由だけでお願いをするということでは、もう続かないということは誰しもがわかっていることだと思います。 単なる広告塔としてではなく、スポンサードしてくれる企業がどんなメリットを競技団体や選手たちに求めているのかをきちんと把握したうえで、それに沿ったご提案をできるかどうかにかかってくるのではないかと思います。 キーワードは「事業競争」。「御社とこういう取り組みをして、こういう社会をつくっていくパートナーとして一緒にやっていきたいので、そのためにはどのくらいの支援を必要としています」ということを明確に提示していけるかどうかが重要になってくるだろうと。企業に対するプレゼン

テーションだけでなく、事業のマネジメントや、検証、評価ができるかどうかという、競技団体や選手の能力が問われる時代になってきます。人材をどう育成していくのかという課題も出てきますが、やはり単にお願いをするだけではなく、競技団体や選手側が、企業にとってメリットを感じられるパートナーとなり、一緒に価値を生み出していけるかどうか。お互いがwin-winな関係性をつくれた場合には、スポンサードを考えていただけるということになっていくのだろうと思います。

一 例えば、参天製薬は2020年8月に国際視覚障がい者 スポーツ連盟と連携を開始したり、同年10月にはNPO法人日 本ブラインドサッカー協会と10年間の長期パートナーシップ契 約を締結しました。これは、視覚障がい者スポーツを通じて、 視覚障がいの有無に関わらず、人々が交じり合い、いきいきと 共生する社会の実現をめざしたものです。また、視覚に障が いのある従業員が「社員先生」となり、小学生を対象とした視 覚障がいに対する理解を向上するプログラムの開発、実施も 行っています。こうした企業と競技団体との特性が合致した 取り組みは、いろいろと考えられるのではないでしょうか。

競技団体側がそういう提案をしていけるかどうか、そしてそういうことを求めている企業とマッチングしていけるかどうかが重要になってくるのだろうと思います。

―― 組織としての人材育成という点では、河合さんたちの 次の世代についてはいかがでしょうか?

2016年にJPCではアスリート委員会を設置し、また2021年9月 4日には、日本人として初めて鈴木孝幸選手(先天性四肢欠 損のパラ水泳選手。2004年アテネパラリンピックから5大会連 続出場し、東京パラリンピックでは2個の金メダルを含む5個の メダルを獲得)がIPCのアスリート委員に当選したことが発表 されました。彼らが中心となっていくことが期待されています。

小さな一歩の積み重ねによる共生

一東京オリンピック・パラリンピックは一体となって取り組まれてきたわけですが、JOC(日本オリンピック委員会)とJPCの関係性というのは今後どうなっていくことが望まれますか?東京オリンピック・パラリンピックでは、「共生」をテーマに、初めて日本代表選手団が開会式や式典で着用する公式ユニフォームのデザインが統一されるなど、JOCとJPCの関係性としても非常に緊密化が進みました。今後はより実行可能な部

分で協働していくと思います。世界では、例えばアメリカや南アフリカ、ノルウェー、オランダはオリンピック委員会とパラリンピック委員会が統一団体となっていて、南アフリカは東京パラリンピックで選手団団長を務めた方は、東京オリンピックでは副団長を務めた方でした。ノルウェーは東京オリンピックの選手団スタッフが半数ほど残って、東京パラリンピックにも従事していました。そうした人材の有効活用が世界で進み始めているということは明らかですので、日本もどのような形でJOCとJPCが連携を図っていくのかというところは議論の余地があるかと思います。いずれにしても今後は、JOCだけ、JPCだけということではなく、それぞれのスタッフがNFも含めて全体を把握するような人材の育成が求められていくと思いますので、積極的な人事交流を図っていくことも重要だと思っています。

―― オリンピックとパラリンピックを一緒にしたらどうか、という 意見もありますが、どう考えていますか?

IOCとIPCの組織体制をどうするかも含めて、この5年、10年 で解決するような簡単な話ではないと思っています。将来的 にそういう動きがあってもいいのかなとは思います。ただ、オリ ンピックだけでもどの競技を採用するかというのは毎回のよう に激しい競争が繰り広げられているなか、障がいによるクラス 分けごとに多くの種目があるパラリンピック競技をどこまで入れ られるのかということは大きな問題になることは間違いありませ ん。その分、大会日程を延ばせば開催都市の負担がさらに大 きくなることは明らかです。そう考えると、大きな動きを求めるよ りも、今できることをやっていくことのほうが現実的かなと思いま す。例えば、東京オリンピックの閉会式では組織委員会の橋 本聖子会長が、東京パラリンピックについても述べられ、パラリ ンピックの映像も流れたというのは歴史的快挙だと思います。 私からすれば天変地異が起こったくらいの出来事でした。そ れほど橋本会長をはじめ、組織委員会が東京パラリンピック にも力を注いでくださったということの表れであり、まさに一体と







東京2020パラリンピック水泳で 5個のメダルを獲得した鈴木孝幸選手

なっていたのだと思います。こういう小さな一歩の積み重ねが 重要だと思いますので、大会や組織を統合するという議論を する前に、共通の価値観を持って、社会にインパクトを与えら れる大会にしていく努力を共にしていくことのほうが重要のよう に思います。

---- 東京オリンピック・パラリンピックのテーマであった「多 様性」「共生社会」という点において、ボランティアでも障が いのある人たちが活躍したということは非常に大きな意味が あったと思います。

組織委員会の「ボランティア検討委員会」で相当な議論を交 わし、日本財団パラリンピックサポートセンター(現・日本パラス ポーツセンター)、日本財団ボランティアサポートセンターにも協 力をしていただきながら実現できたことだったことも、大きな 成果だったと思います。もし東京オリンピック・パラリンピック でできなければ、今後日本で「共生社会」を実現させていく ことは難しいだろうと思っていました。そもそもボランティアと は、誰かの役に立ちたいという思いのもと自主的にやるもの であって、それを障がいがあるからできないというのは、社会 のシステムにこそ障がいがあるということ。そういう社会を変 えていく意味でも、大きな意義がありましたし、障がいのある 人、ない人、それぞれがお互いにとても良い経験をしたので はないかと思います。そして今回、ボランティアとして東京オリ ンピック・パラリンピックに携わった人たちが、それぞれの職場 などに戻っていった時に、経験したことを自分の周りでもやっ てみようと思えるきっかけにしてくれることを願っています。

----2021年10月25日(日本時間)に開催された世界の国· 地域のオリンピック委員会の会合で橋本会長が「東京モデ ル として、東京オリンピック・パラリンピックで見出された価値 を今後の大会に活用してほしいとお話されましたが、JPC単 独では何かそういう総括のようなものは出されるのでしょうか? 東京オリンピック・パラリンピックの象徴として、一般的にはメ ダルの数が一番目立ったわけですが、そこだけではなく、さま ざまな視点で組織委員会をリーダー役として推進してきたこ とがありますので、それが大会開催によってどういう結果をも たらしたのかは、JPCとしてもしっかりと検証していかなけれ ばならいけないと思っていますし、実際に進めています。そし て今後の2024年パリ・パラリンピック以降に活用していくこと が重要です。IPCではこれまでの強化委員会を、2022年1月 から強化本部に格上げして新たな体制をしきました。先述し

た「JPC戦略計画」で掲げた「世界を目指すパラアスリート の活躍」をめざした強化を、強化本部で一元的に取り組ん でいきます。選手の発掘や育成、指導者やトレーナーの育 成、クラス分け、医科学的情報提供など、それぞれの分野の 専門家に入っていただき、しっかりとした体制でやっていこう ということで、今まさに準備を進めているところです。

パラスポーツの重要性

――スポーツは社会課題を解決する糸口になり得るものだ と思いますが、とりわけパラスポーツにはそうした可能性が大 きいように思います。

障がいの有無に関係なく、誰しもが、少しでも健康で長く生き ていきたいという願望があると思いますが、障がいのある人 たちはよりスポーツを必要とする度合いが高いということが 言えるでしょう。そういう意味においては、パラスポーツの重 要性はやはり大きいと思います。

―― 東京パラリンピックをきっかけに、パラスポーツの存在価 値や役割の大きさについては理解度が深まったように思いま す。では今後は、どのような取り組みが必要となるのでしょうか? 東京オリンピック・パラリンピックに向けてオリンピック・パラリン ピック教育を推進してきたことで、今の小学生、中学生は、オリ ンピックとパラリンピックの垣根が低く、パラリンピック選手にもオ リンピック選手と同じような認識をもってくれています。子ども たちにとってはどちらも「世界をめざしているすごい選手」とい う同じくくりなんですね。ある保護者の方から聞いたのです が、ご自身のお子さんが東京パラリンピックで車いすバスケット ボールの試合を見ていて、「自分もやりたいから、選手たちが 乗っている車いすが欲しい と言ってきたんだそうです。でも、 調べてみたら数十万円もする高価なものということがわかっ て困ったなんていうお話をうかがったのですが、このこと自体、 これまでには考えられないことだったわけです。つまり、スケー

トボードの試合を見て、かっ こいいからボードがほしいと 思ったのと同じように、車いす バスケットボールに魅力を感 じたということですよね。東京 パラリンピックによって、社会 が実際に変わってきていて、 良い風が吹いていると思い





(2022年2月)

ますので、現役選手に はぜひこれからも子ど もたちと触れ合う機会 (YO (を持ち続けていっても らいたいと思います。 特に若い選手たちは 子どもたちとの年齢も 近いので、より身近に 感じ、応援する気持ち が生まれるでしょうし、 選手のモチベーション にもつながっていくと 思うんです。一方、JPC

としてはIPCのアギトス財団(2012年に設立されたIPCの開 発を担う機関。インクルーシブな社会実現のためのツールと して、パラスポーツの発展を国際的にリードする機関として活 動)がIPC公認のパラリンピック教材『I'm POSSIBLE』のさ らなる推進のほか、文部科学省の協力をいただきながら、パ ラスポーツの価値を伝える教員を育成していく研修プログラ ムを各自治体で行ったり、教員免許取得のカリキュラムのなか にパラスポーツの指導カリキュラムを入れられないかというよう なことを実現させていきたいと考えています。

--- アスリートのセカンドキャリアの問題については、いかが でしょうか?

引退後の生活については、選手自身が考えなければいけな いというふうになりがちですが、もちろんそれは当然ではある ものの、選手がセカンドキャリアについて考えられる環境に あるかどうかということがおざなりになっているように感じま す。文部科学省では幼稚園教育要領や、小学校、中学校、 高校の学習指導要領に「キャリア教育」(一人ひとりの社会 的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育 てることを通して、キャリア発達を促す教育)を盛り込んでい ます。私見を述べさせてもらえば、10年後はどういう社会に なっているのか、あるいはどういう職業が生き残っているの か、ということは誰にもわからない時代なわけです。それなの に「将来どんな職業に就きたいか」という教育は、やはり限 界があると思っています。それより大事なのは、最終的にど ういう状態でありたいのか、どういう状態の自分が幸せなの か、という本質的なところの気づき。それが「キャリア教育」の 根幹になければいけないと思っています。

北京パラリンピックでも日本代表選手団団長を務められま す。団長として大会や選手に求めるものとは何でしょうか?

大きな方向性は、東京パラリンピックと変わらないのだろうと考 えています。日本と中国という開催場所の違いはありますが、 それでも引き続き、徹底した新型コロナ感染症対策は必要 不可欠ですし、大変厳しいなかで開催の準備にあたってこら れた中国や北京パラリンピック組織委員会、そして送り出して くださる日本の皆さんへの感謝の気持ちを持つことが大切で す。そのうえで選手たちにはベストなパフォーマンスを発揮し てほしいと思っています。ただ、東京パラリンピックを経験して いない選手たちにすれば、前回の2018年平昌パラリンピック 以前とはまったく違う環境の大会になります。現地では外部と の接触を徹底的に遮断する「バブル方式」のなかで過ごさな ければいけないですし、入国後は毎日PCR検査が義務付け られています。そのようなことは選手団のほとんどが初めての 経験となります。戸惑いや窮屈さを感じることもあるとは思い ますが、文句を言ったところで何も始まりません。とにかく「これ が当たり前なんだ」と思って、しっかりとプレーブックに従ってほ しいと思います。また、中国はウインタースポーツの国際大会 開催の実績がそれほどないため、競技会場がどういう雪質 や氷上なのか、選手たちは一様に不安を持っていると聞い ています。しかしそれは、中国選手を除いて世界の選手たち が同じ条件なわけですから、結局は各国選手団のチーム力 や、選手個々の適応力が問われている大会になると思いま すので、日本代表選手団としてはチーム力を上げ、一致団結 をして準備を進めていきたいと思っています。

―― 最後に、次世代につなげていきたいことを教えてください。

これからもさまざまな形で東京パラリンピックが開催された 意義を伝えていきたいと思っています。これからの日本のパ ラスポーツ界や社会にとって、東京パラリンピックが起点にな ることは間違いありませんので。そして、大会開催をきっかけ にして掲げた理想を、ひとつでも実現させていきたいと思っ ています。これからは、東京パラリンピックを経験した選手た ちが中心となり、自分たちが得たものを次世代に残していこ うとしていくと思います。その際、どうやって形にしていくの か、そのノウハウを伝えていくことが自分の役割かなと。また、 今の環境を当たり前に思うのではなく、常に感謝し、そしてさ らにより良くしていこうとする気持ちを持てるような選手の育 成にも携わっていきたいと思っています。

■ … 河合純一氏 略歴	… 世相

1912 _{明治45}	ストックホルムオリンピック開催(夏季) 日本から金栗四三氏が男子マラソン、 三島弥彦氏が男子100m、200mに初参加	1952 ^{昭和27}	ヘルシンキオリンピック開催(夏季) オスロオリンピック開催(冬季) 1955 日本の高度経済成長の開始	1980 昭和55	モスクワオリンピック開催(夏季)、 日本はボイコット アーネムパラリンピック開催(夏季) レークプラシッドオリンピック開催(冬季) ヤイロパラリンピック開催(冬季)	2004 _{平成16}	アテネオリンピック・パラリンピック開催(夏季) 野口みずき氏、女子マラソンにて金メダル獲得 2004 河合 純一氏、アテネパラリンピックにて、 金メダル1つ、銀メダル4つ、銅メダル1つを獲得 2005 河合 純一氏、世界ユース選手権大会
1916	第一次世界大戦でオリンピック中止	1956 昭和31	メルボルンオリンピック開催(夏季) コルチナ・ダンペッツォオリンピック開催(冬季)		冬季大会への日本人初参加		日本水泳チームの監督に就任
1920	アントワープオリンピック開催(夏季) 熊谷一弥氏、テニスのシングルスで銀メダル、		猪谷千春氏、スキー回転で銀メダル獲得 (冬季大会で日本人初のメダリストとなる)	1984 昭和59	1982 東北、上越新幹線が開業 ロサンゼルスオリンピック開催(夏季) ニューヨーク/ストーク・マンデビルパラリンピック	2006 平成18	トリノオリンピック・パラリンピック開催(冬季) 2006 河合 純一氏、JICA青年海外協力隊として マレーシアで視覚障がい者の水泳指導を行う
	熊谷一弥氏、柏尾誠一郎氏、テニスのダブルスで 銀メダルを獲得	1959	1964年東京オリンピック開催決定		開催(夏季) サラエボオリンピック開催(冬季) インスブルックパラリンピック開催(冬季)	2007 _{平成19}	第1回東京マラソン開催
1924 ★正13	パリオリンピック開催(夏季) 内藤克俊氏、レスリングで銅メダル獲得	1960	ローマオリンピック開催(夏季)	1988	ソウルオリンピック・パラリンピック開催(夏季)	2008	北京オリンピック・パラリンピック開催(夏季)
1928 昭和3	アムステルダムオリンピック開催(夏季) 日本女子初参加 織田幹雄氏、男子三段跳で全競技を通じて	昭和35	スコーバレーオリンピック開催(冬季) ローマで第9回国際ストーク・マンデビル 競技大会が開催 (のちに、第1回パラリンピックとして	昭和63	鈴木大地氏、競泳金メダル獲得 カルガリーオリンピック開催(冬季) インスブルックパラリンピック開催(冬季)	平成20	男子4×100mリレーで日本(塚原直貴氏、末續 慎吾氏、髙平慎士氏、朝原宣治氏)が3位となり、 男子トラック種目初のオリンピック銅メダル獲得* *後に銀メダルに繰り上げ
	織田軒雄氏、男士三段跳で宝競技を通じて 日本人初の金メダルを獲得 人見絹枝氏、女子800mで全競技を通じて 日本人女子初の銀メダルを獲得	1964	(のちに、弟 T回ハブリンピックとして 位置づけられる) 東京オリンピック・パラリンピック開催(夏季)	1992 _{平成4}	バルセロナオリンピック・パラリンピック開催(夏季) 有森裕子氏、女子マラソンにて 日本女子陸上選手64年ぶりの銀メダル獲得		2008 河合 純一氏、北京パラリンピックにて、 銀メダル1つ、銅メダル1つを獲得 2008 リーマンショックが起こる
1022	サンモリッツオリンピック開催(冬季)	昭和39	円谷幸吉氏、男子マラソンで銅メダル獲得 インスブルックオリンピック開催(冬季)		アルベールビルオリンピック開催(冬季) ティーニュ/アルベールビルパラリンピック開催(冬季)	2010 平成22	バンクーバーオリンピック・パラリンピック開催(冬季)
1/0-	ロサンゼルスオリンピック開催(夏季) 南部忠平氏、男子三段跳で 世界新記録を樹立し、金メダル獲得	1968	(1964) 東海道新幹線が開業 メキシコシティーオリンピック開催(夏季)		1992 河合 純一氏、バルセロナパラリンピックにて、 17歳で銀メダル2つ、銅メダル3つを獲得	平风22	2011 東日本大震災が発生
1936	レークプラシッドオリンピック開催(冬季) ベルリンオリンピック開催(夏季)	昭和43	テルアビブパラリンピック開催(夏季) グルノーブルオリンピック開催(冬季)	1994 平成6	リレハンメルオリンピック・パラリンピック開催(冬季) 1994 河合 純一氏、早稲田大学教育学部に入学 河合 純一氏、世界選手権にて、	2012 平成24	ロンドンオリンピック・パラリンピック開催(夏季)
	田島直人氏、男子三段跳で 世界新記録を樹立し、金メダル獲得 織田幹雄氏、南部忠平氏に続く	1969 昭和44	日本陸上競技連盟の青木半治理事長が、 日本体育協会の専務理事、 日本オリンピック委員会(JOC)の委員長に就任		金メダル3つ、銀メダル1つを獲得 1995 阪神・淡路大震災が発生	2013 平成25	2020年に東京オリンピック・パラリンピック 開催決定
	日本人選手の同種目3連覇となる ガルミッシュ・パルテンキルヘンオリンピック開催		1969 アポロ11号が人類初の月面有人着陸	1996	アトランタオリンピック・パラリンピック開催(夏季)	2014 平成26	ソチオリンピック・パラリンピック開催(冬季)
	(冬季)	1972 昭和47	ミュンヘンオリンピック開催(夏季) ハイデルベルクパラリンピック開催(夏季)	平成8	有森裕子氏、女子マラソンにて銅メダル獲得 <mark>1996 河合 純一氏、アトランタパラリンピックにて</mark> 、	2016	2015 河合 純一氏、日本水泳連盟理事に就任 リオデジャネイロオリンピック・パラリンピック開催
1940 昭和15	第二次世界大戦でオリンピック中止		札幌オリンピック開催(冬季) 1973 オイルショックが始まる		金メダル2つ、銀メダル1つ、銅メダル1つを獲得 1997 香港が中国に返還される	平成28	(夏季) 2016 河合 純一氏、日本人初パラリンピック殿堂入り
1944	第二次世界大戦でオリンピック中止		1975 河合 純一氏、静岡県に生まれる	1998 _{平成10}	長野オリンピック・パラリンピック開催(冬季)	2018 平成30	平昌オリンピック・パラリンピック開催(冬季)
	1945 第二次世界大戦が終戦 1947 日本国憲法が施行	1976 昭和51	モントリオールオリンピック開催(夏季) トロントパラリンピック開催(夏季)	2000	シドニーオリンピック・パラリンピック開催(夏季)	2020	新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、 東京オリンピック・パラリンピックの開催が
1948 昭和23	ロンドンオリンピック開催(夏季)** ※日本は敗戦により不参加		インスブルックオリンピック開催(冬季) 1976 ロッキード事件が表面化	平成12	高橋尚子氏、女子マラソンにて金メダル獲得 2000 河合 純一氏、シドニーパラリンピックにて、 金メダル2つ、銀メダル3つを獲得		2021年に延期 2020 河合 純一氏、日本パラリンピック委員会 委員長に就任
	サンモリッツオリンピック開催(冬季) 1950 朝鮮戦争が勃発	1978 昭和53	8カ国陸上(アメリカ・ソ連・西ドイツ・イギリス・ フランス・イタリア・ポーランド・日本)開催 1978 日中平和友好条約を調印	2002 平成14	ソルトレークシティオリンピック・パラリンピック開催(冬季)	2021	東京オリンピック・パラリンピック開催(夏季)
	1951 日米安全保障条約を締結				2002 河合 純一氏、日本パラリンピアンズ協会を 発足させ、会長に就任		

90







パラリンピックに初出場したバルセロナ1992大会 (左が本人)



数昌時代



アテネ2004パラリンピック



2009年IOC総会(コペンハーゲン)でのプレゼンテーション



日本パラリンピアンズ協会会長として講演



北京2022パラリンピック日本選手団結団式会見 (2022年2月)



公式服装発表会で選手団長として挨拶



閉会式に参加し手を振る日本代表選手団



会場で選手を応援する河合団長



東京2020パラリンピック水泳で金メダルを獲得した木村敬一選手



車いすテニス男子シングルスで金メダルを獲得した国枝慎吾選手



東京2020パラリンピック開会式



]合純一氏



東京2020パラリンピック5人制サッカー(ブラインドサッカー)



『視覚障害者のための スポーツ指導』



東京2020パラリンピック水泳で 5個のメダルを獲得した鈴木孝幸選手



車いすバスケットボールの香西宏昭選手

92